

自律（自己）と非自律（他者）のあいだにある身体
 ——ソー・ソウエン個展「Your Body is the Shoreline」に寄せて

山本浩貴（文化研究者、金沢美術工芸大学講師）

あらゆる人間は、個として自律している——長い間、このことは哲学や政治学といった人文科学の領域において自明の前提であった。「正義」や「公正」といった概念は、この「自律した個」を条件として練り上げられてきた。誰もが個人として等しく尊重を受けるに値するという現在の人権思想は、こうした背景のなかで形成された。

一方で、個として完全に自律した人間などいない——近年の人文科学者たちは、このことを新たな前提として、これまでの成果を再構築しようとする傾向がある。たとえば、人々の相互依存と脆弱さを基盤として積み上げられた「ケア」の思想は、そうした流れのなかに位置付けることができる。誰の助力も受けることなく生きてきた者など、いない。

これら2つの命題は、一見すると矛盾するものに思われるが、実際は互いに排他的ではない。人は自律していると同時に、自律していない——それが実相である。この実相を知るのは、私たちにとって、吉報であり凶報でもある。自律と非自律のあいだには、人間に背負わされた無数の幸と不幸がカオスのように混在している。

ソー・ソウエンは、人間が自律的であると同時に非自律的であるために宿命的に抱える性（さが）を、様々な表現を通じて探求しているアーティストである——私は、そのように感じた。それゆえ、ソウエンの芸術実践には、どのようなときにも「身体」という問題がついてまわる。なぜなら、身体は、人間の同時的（非）自律性の象徴であるから。

人は老いのプロセスに伴い、あるいは生得的に、自己の身体に対して部分的に制御を失っていく。だが、誰もが命の終わりまで、完全に身体を手放すことはできない。身体は魂（そのようなものがあるとすれば、だが）の牢獄である、とされる所以だ。だが一方で、人は身体という輪郭を獲得してはじめて「私」となる。

身体があるから、私たちは他者と完全に一体化できない。他方、身体があるから、私たちは個々の「私」として世界に存在している。私たちの身体は他者から影響を被るが、他者の身体を自由にコントロールすることはできない。すなわち、身体の非自律性とは他者の別名である。ままたらない身体、ままたらない他者、ままたらない他者としての身体……

ソー・ソウエンとサラ・ミリオによるパフォーマンス《The Egg》が、その鑑賞者に悲哀と希望を同時にもたらすように思われるのは、そのなかで身体の自律性と非自律性が両義的に作動しているからだろう。あれほど脆弱な、人間の身体よりもはるかに脆弱な存在を、2人のパフォーマーは相互に自律し、同時に自律していない2つの身体で慈しむ。

ソー・ソウエンのほかの作品も、そうした一貫した視座から考察できる。「呼吸を記録する」や「身体の穴を穴だらけに描くシリーズ」などの平面作品は、自らの身体が自律性を行使しうる範囲を、その境界線を見定める作業として解釈しうる。身体の（非）自律性は、人間の喜びの条件であり、苦しみの元凶でもある——ソウエンは、それをよく知っている。